

論文の内容の要旨

論文題目 セレウコス朝およびアルシャク朝時代の王権の展開と都市バビロン
— 『日誌』を主要資料とした研究—

氏名 三津間 康幸

本論文では、最近刊行されたアッカド語楔形文字資料『(天文) 日誌 (Astronomical) Diaries』を主要資料として用い、そこに言及される諸官職の権限や地位、在職者の性格や行動の特徴について、そしてバビロニア (アッカド語の名はアッカド Akkad) の都市バビロンと前記の諸官職や王らによって構成される王権との関係について考察した。

日誌はアッカド語で『常時観測 *na-āru ša giné*』と呼ばれる粘土板文書の集合である。そして主としてバビロンにおいて、都市の主神マルドゥクの神殿エサギラに代々奉職した書記たち (後述の「バビロン人」に属する) が長年書き継いだ資料と考えられる。それらは 1 ヶ月分が 1 まとまりを為すように作られた。このまとまりの内部は、完全な形では、日々の天文・天候、農産物の価格 (銀との対価)、惑星の運動、バビロンを流れるユーフラテス河の水位、そして地上で起こった諸事件の 5 項目に分かれる。

現存する日誌の年代は前 7 世紀半ばから前 1 世紀前半にわたるが、前記の研究テーマに資する内容は、主としてセレウコス朝のバビロン支配期 (前 305/4-141/0 年) と、アルシャク朝の支配期 (前 141/0 年以降) の日誌に記されているので、本研究ではこれらの時代を対象として研究を行った。

第 1 部では、資料の性格を検討した。扱った資料は日誌と、「年代誌 *Chronicles*」である。本研究の対象となる時代を扱う年代誌は、そのほとんどがバビロンで作成された、そして日誌と何らかの関連を持つ、と見られる資料群である。残存する年代誌の数は少ないが、本研究にとって重要なデータを一定量含む。

第 1 章では、日誌について検討した。日誌が記述する地上的事件は、エサギラに関係することを中心とした、都市バビロンで起こる出来事と、バビロンを統治する王権が関わる出来事の 2 種類が主であることを示した。

また、日誌中の項目分けの仕方や、各項目内部の事項の配列などにかんがりの一貫性があること、この傾向は後代になるほど強まることを明らかにした。これらのことから、特にセレウコス朝時代以降の日誌は厳密な規則に従って作られた一連のテキストであり、その限りにおいてシリーズと呼べること、このゆえに日誌に継続的に現れる官職名などもある種の術語として扱えることを示した。

日誌の作成過程については、天文事象 (と水位) を観測しながら記録する 1 次的観測記録 (短期日誌) が最初に作成されたこと、そしてこれに価格や地上的事件といった情報を付け加えて作成された中間報告的な記録 (中期日誌, 2 ヶ月程度までの期間をカバー) があること、さらに中間報告的な記録をいくつかまとめる形で、より長期間をカバーする日誌 (長期日誌) があること、そして長期日誌は最終的な保存資料と考えられ、その多くは 4 ヶ月 (1

年の前期・中期・後期) または 6 ヶ月 (1 年の前半・後半) 分が一枚の粘土板にまとめられる形をとったこと, などを明らかにした。

第 2 章では、「年代誌」と呼ばれる資料群の性格を検討した。個々のテキストの記録方法や内容にはばらつきがあり, その共通点は 3 人称で, 地上の諸事件を記録するというものにとどまる。しかし総体としてみると, その内容や, 記録方法 (の歴史的な変遷) に日誌と類似または共通する点が多く, 少なくとも個別の年代誌と日誌との間で, 作成の際に相互に参照が行われた可能性は十分にあることを明らかにした。

第 2 部では, 日誌や年代誌にある程度継続的に言及される, 王権を構成する諸官職の権限や地位, そして各職に就任した人物の性格や行動の特徴について考察した。資料の性格上, 属州バビロニアで活動する者が中心的な対象となった。

第 3 章では, 「上部諸属州」と呼ばれる, セレウコス朝のユーフラテス河以東の領域にはそれを統括する総督が置かれたこと, そして「4 将軍の上に立つ将軍 *rab uqa ša ana mu□□i erbet rab uqa*」などとアッカド語で呼ばれる官職がこの総督職に相当することを明らかにした。またアルシャク朝時代にもこの官職が引き継がれ, 前 110 年代に「大將軍 *rabbi uqānī*」と呼ばれる職に代替されたことを確認した。

第 4 章では「アッカドの知事 *muma'iru*」と呼ばれる, ハカーマニシュ朝時代以来の属州総督 (サトラップ) に相当すると見られる官職が, 少なくとも前 270 年代までは属州バビロニアの財政面の責任者として任務を果たしていたこと, その後も, 一時廃止された可能性はあるものの, アルシャク朝時代まで存在が確認できることを明らかにした。

第 5 章では「(アッカドの) 将軍 *rab uqu / uqa / uqānī*」と呼ばれる官職について, この職が前 270 年代以降資料に現れ, アルシャク朝時代まで属州バビロニアにおける王朝の軍事力, あるいは軍事行動を統率する職として存続することを明らかにした。

第 6 章では, 神殿の監督に当たったと思われる諸官職について検討した。特に, アルシャク朝時代に王の側近くで仕えたとみられる「祭司たちの長 *rab kumari*」職の存在を明らかにした。また先行研究で地方官として取り扱われていた諸官職 (*paqdu, zazakku, purusutattesu, uppuḍētu*) の活動を検討した。そしてこれらのうち, *paqdu* や *zazakku* はバビロン市中で活動した地方官とみられることを確認し, 一方 *uppuḍētu* や *purusutattesu* については前記の「祭司たちの長」同様王の側近くで仕えた可能性があることを指摘した。

第 3 部では都市バビロン内部にいかなる性格を持った集団が居住したのか, そして彼らがどのように王権と関係を取り結んでいたのか, といった問題を検討した。

第 7 章では「バビロンの長官 *pā□āt Bābili*」と, それによって代表される「(バビロン) 市民 *puli□ē*」について検討した。「市民」が前 2 世紀前半にバビロンに登場したギリシア色の濃い集団であることを確認した。またアルシャク朝時代に王らがバビロンに送付した文書の宛名などから判断して, その王権が「長官」「市民」らとの連絡を, 後述の「議長」「寄合」「バビロン人」などとの連絡よりも重視したように見えることを述べた。

第 8 章では「エサギラの議長 *šatam Esagil*」「エサギラの寄合 *kiništu*」「バビロン住民 *mārū Bābili*」, そして彼らによって代表される「バビロン人 *Bābilāya*」について検討した。

まず日誌・年代誌における語句の用法を分析し, 「バビロン人」がバビロンに「市民」登

場以前から居住した原住民を広く指す用語であること、「住民」は前4世紀後半～3世紀前半に資料に頻出する語句で、「議長」や「寄合」など、「バビロン人」の間の代表的な存在のことを指すこと、問題の資料で「議長」「寄合」の語が実際に用いられるのは（その存在自体は古くに遡るけれども）、もっぱら前3世紀後半以降であること、を明らかにした。

またセレウコス朝時代には、エサギラをはじめとするバビロン土着の諸神殿に対する、王権からの物質的な恩恵の例がしばしば見られるが、アルシャク朝時代には類例を見出し難いことを、関連資料を挙げつつ明らかにした。

第9章では、王権が上記の諸集団あるいは個人に対して送った文書および、それらの読み上げによる告知と、情報の受容について考察した。アルシャク朝時代の日誌によれば、諸官職の任命や戦勝といった出来事が、バビロン市中における文書の読み上げによってしばしば告知されること、一方セレウコス朝時代には類例がほとんど見られないことを確認した。そして読み上げられた文書の中にはプロパガンダ的な情報も含まれていること、日誌の書記の側には、その種の情報の受容には慎重な態度が見られることを明らかにした。

第10章では、前3世紀第4四半期以降アルシャク朝時代まで、王や「上部諸属州」、属州レベルの諸官職など、王権を代表する人々によって、エサギラやその関連の聖所で、王や王族、そして供犠者自身の「生命 / 健康 *bul□u* のため」という目的で捧げられた供犠および、研究史上これと一緒に取り扱われてきた、王や王族の「儀式 *dullu* のため」に捧げられた供犠とについて考察した。特に日誌によく記される「生命のため」の供犠については、時期によってその形式に変化が見られること（式次第などは共通で「生命のため」という目的が消されるケースを含む）を明らかにした。変化の原因についても、各時期の政治情勢、供犠者の地位、神殿の関与の程度といった問題と関連させて考察した。

終章では主として**第2部**、**第3部**の議論を総括し、時間の経過に応じてその研究対象に見られる変化を明らかにし、また変化の原因についての見通しを示した。

第2部で考察した諸官職については、アルシャク朝時代の初期（前120年代半ばまで）にはギリシア名を持ち、都市（セレウキア）を居所とするような人々がもっぱら就任し、それ以後は、イラン名を持ち、都市外に居所を設けるような人々が就任することが多いことを明らかにした。その原因について、王権を担う人々がセレウコス朝時代以来のギリシア・マケドニア系、あるいは親ギリシア的な人々から、イラン系で遊牧民の出であるアルシャク王家と同様の出自の人々に入れ替わった、あるいは、非イラン系・非遊牧民出自の人々の間にもイラン名の使用や、都市を離れて生活を送るスタイル（遊牧民を思わせる）に親しむ傾向が現れたという、2つの見通しを示した。

また**第3部**で考察した、都市バビロン内部の諸集団と王権との関係については、セレウコス朝時代とアルシャク朝時代を比べると、アルシャク朝時代には土着の諸神殿への財物の供与の例が見出し難いこと、一方で王権がバビロン市中のギリシア的な集団である「市民」との連絡を重視したことに注目した。そしてその原因について、当時の「市民」集団に比較的強く見られる軍事的な性格への配慮があったのではないか、あるいはアルシャク朝のコインに刻まれた王の称号や王の胸像などに示された、王たちの親ギリシア的な姿勢と関係するのではないかといった見通しを示した。